美術科教育学会通信 №46

２００２年９月２４日発行

事務／通信　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室内　柴田和豊宛
Ｔｅｌ．/０４２（３２９）７６０８　Ｆａｘ．/０４２（３２９）７５９９（柴田直通）
Ｔｅｌ．/Ｆａｘ．０４２（３２９）７５９４（相田直通）
Ｅ－Ｍａｉｌ．/kshibata@u-gakugei.ac.jp（柴田）/aidaman@u-gakugei.ac.jp（相田）

第２５回美術科教育学会 横浜大会及びプレシンポジウムのご案内

宮坂元裕（横浜国立大学）

第 25 回美術科教育学会は横浜で開催いたします。それに先だち1月25日に、学会会場と同じ場所で、プレ・シンポが開催されます。

まず、そのご案内をいたします。

第 25 回大会、プレ・シンポジウム
期日　平成 15 年 1月 25 日（土）13:30～
会場　横浜国立大学教育文化ホール
■研究部会の主催で、授業研究部会が企画中です。詳細は11月発行の通信に同封いたします。

■第 25 回横浜大会のテーマについて

テーマは、『鑑賞・表現による教育―メディア芸術と文化芸術振興法の挟間で―』としました。

横浜トリエンナーレなどで積極的に取り組んだ、メディア芸術というジャンルは急激に拡大しています。学習指導要領・中学美術にも映像メディアは取り入れられるようになり、私達はこのことを無視できなくなりました。子ども達は既にパソコンの画面上で表現や制作を始めています。

一方、文化芸術振興法は、将来日本が文化や芸術を輸出する国になるようにと打ち出されたものです。学校教育の関係者は一瞬喜びましたが、よく読んでみると、学校教育には、あまり期待していません。むしろ学校教育では文化や芸術を世界に輸出するような方向は期待できないと読みとれる部分もあり、私達は奮起しなければなりません。

美術教育という概念をギリギリに絞った時、「見る・描く・つくる」という子どもの行為が残ります。そして、このことは、教育がどのように変化しようとも、子どもにとっては、重要なことです。改めて原点にもどる意味でこのようなテーマを設定しました。

26日の講演は、現代フランス哲学が専門で、メディア芸術に造詣が深い、横浜国立大学教授小野康男氏に、子どもとメディア芸術の関係を語ってもらいます。27日の講演は、InSEA ハンブルク大会で基調提案を行ったオルデンブルク大学教授、ルドルフ・ツア・リッペ氏を招聘し、芸術の鑑賞・表現における精神性について 2 時間にわたり語ってもらいます。

横浜は芸術文化の発信地になりつつあります。また、横浜駅―東京駅は30分で結ばれています。ぜひ横浜におでかけください。

研究発表申し込み〆切
平成14年11月30日（詳細は同封案内書〔黄〕）

参加申し込み〆切 3 月 14 日（金）詳細案内は 11 月発行の通信発送時に同封いたします。
○参加費　　5,000 円
○懇親会費　3,500 円（学・院生 2,000 円）

◆◇第 25 回横浜大会の概要◇◆

■会期：　平成 15 年 3 月 26 日（水）～
3月 28 日（金）
■会場：　横浜国立大学教育文化ホール

■大会第一日　3 月 26 日（水）
12:00 ～ 13:00　受付
13:00 ～ 13:20　開会
13:30 ～ 16:30　研究発表
16:40 ～ 17:40　講演　小野康男氏

■大会第二日　3 月 27 日（木）
10:00 ～ 12:00　研究発表
昼休み（含理事会）
13:30 ～ 15:00　研究発表
15:10 ～ 17:10　講演 ﾙﾄﾞﾙﾌ･ﾂｱ･ﾘｯﾍﾟ氏
移動
17:30 ～ 19:30　懇親会

■大会第三日　3 月 28 日（金）
10:00 ～ 11:00　研究発表
11:00 ～ 12:00　特別研究発表
12:00 ～ 13:00　総会　閉会

＊　＊　＊

InSEA(The International Society for Education through Art) 世界会議 2002 ニューヨーク大会　速報

宇田秀士（奈良教育大学）

InSEA 世界会議ニューヨーク大会が、８月19日から24日まで，ニューヨーク市のブロードウエイに位置するマリオットマーキス・ホテルで開催されました。世界会議や国際交流の意義、発表のあり方などについては、次の47号で、新しくInSEAアジア地区評議員に選出された福本謹一氏（兵庫教育大学）から、報告があります。したがって、ここでは、速報的にお知らせいたします。

「美術を通しての国際的会話」の主題の下、伝統，美学，精神，メディアやなどの多彩なテーマの展開によって，美術教育おける国際的交流を可能にする場の設定が、試みられました。この大会までアジア地区評議員を務められた岡崎昭夫氏(筑波大学)によりますと、推定で30カ国５００人程度の参加があり、日本からも 20 名以上の参加がありました。ただ、会場で感じる「人出の実感」は、前回オーストラリア・ブリスベン大会と比べ、やや少ないような印象を持ちました。これは、発表会場の設置状態、昨年の 9．11 事件、物価の高さ、などの影響があるもと思われます。

6 日間の日程の中で、日本でも馴染のあるところでは、Elliot W. Eisner 氏の講演「質的研究に基づく芸術」、Laurie Anderson 氏の基調講演並びにパフォーマンス、Brent Wilson 氏と徳雅美氏による口頭発表「子どもの描画における日本のポップカルチャーの影響」、Philip Yenawine 氏らによる口頭発表「Visual Thinking Strategies (VTS)に関する研究」、Gilbert Clark 氏による口頭発表「子どもの描画の歴史」、Rachel Mason 氏らによる口頭発表「家庭の工芸」、Arthur Efland 氏による口頭発表「美術教育の未来のための３つの視座」などが、ありました。日本の研究者達の招待セミナーでは、仲瀬律久氏(聖徳大学)のもと、王文純氏によるコディネートでパネルが行われました。パネリストの岡崎氏、徳氏、渡邊氏（福島大)、石崎氏（宇都宮大）により、「日本における美術教育と教育改革の伝統」について、それぞれの立場からの発表があり、聴衆からの質問・意見がいくつも出て盛り上がりを感じました。

また、『Teaching Art』『Adventure in Art』などの米国の教科書作成者 Laura H. Chapman

氏は、日本の発表者会場に頻繁に現れ、発表者を激励していたのが印象的でした。

参加者は、それぞれ、発表や講演の合間をぬって､メトロポリタンやMoMAといった美術館､ソーホーの画廊､ブロードウエイ・ミュージカル観劇などで、N.Y.風情を満喫していたようです。なお、3年後次回大会の開催地は、現在決定しておらず、来年４月に決まる予定だそうです。その辺の事情も含め、福本氏に報告していただきますので、お楽しみに。

竹井史氏(富山大)による自主ワークショップ

日本招待セミナーから

美術科教育学会「東地区」､「西地区」研究発表会の活動報告と今後の開催について

本年度から開催している全国を「東地区」「西地区」の２つに分けての地区大会の様子をお知らせいたします。（宇田）

学会「東地区」研究発表会の報告と今後の開催について

宮脇理（元筑波大学）

本年度開催した第1回、第2回の「東地区」大会の概要を報告いたします。ともに発表後に質疑応答と討議の時間を持ちました。第1,2回研究発表会冊子の残部がありますので、お問い合わせ下さい。（有料：各担当者在庫）

なお、これから開催される第３回大会については、金子一夫担当理事の記事を参照し、何かあれば金子理事に問い合わせをしてください。

さらに、次年度「東地区」研究発表会は宮脇(理事)担当、北海道教育大学函館校の佐藤昌彦氏（会員）の企画により、七月頃を予定しています。テーマ、発表者は未定ですが、場所は函館市内です。

■第１回「東地区」研究発表会■

日時：平成 14 年(2002) 2 月 2 日（土）
（冊子発行・実施済み）
場所：筑波大学附属小学校

主題：「効率主義の超克－20世紀に積み残してきたもの－」
提案理由：宮脇　理（担当理事）
発表：・仲瀬律久（聖徳大学）「美術への愛好心」を考える
・岩崎清（こどもの城）「創造性ということ－ブルーノ・ムナーリに触発されて－」
・西村徳行（東京都足立区立花畑中学）「地域と学校、美術教育のあり方について」

■第2回「東地区」研究発表会■

日時：平成14年(2002)７月２５日（木）
（冊子発行・実施済み）
場所：お茶の水女子大学附属小学校
主題:「現場からの発信－東京の附属３校　若い４人の実践を通して考える－」
提案理由：大橋晧也（担当理事）
発表：・大泉義一（東京学芸大附属竹早小）「子どもとカリキュラム」
・小林貴史（東京学芸附属大泉小）「造形活動におけるものやこと との関係性－想像力と場所」
・郡司明子＋辰巳　豊（お茶の水女子大附属小）「造形からアートへ－からだからのアプローチ」
後援:お茶の水大学附属小学校＋同大学こどもの発達教育センター
講話：無藤 隆（お茶の水女子大学教授・附属小学校長）

第３回学会「東地区」研究発表会のお知らせ
（学会美術教育史研究部会と合同開催）

主題　アジア的退行を超えて知的美術教育論へ－現代日本における美術教育理論の課題

日時：平成14年(2002)１２月２１日（土）
10:30 ～ 16:30
会場：茨城大学　教育学部
310-8512 水戸市文京２－１－１
水戸駅から茨大行バスで２０分
日程：
発表　午前の部
・10:30 ～ 11:15　金子一夫（茨城大学）
「美術教育理論のアジア的退行を超えて知的美術教育論へ」
・11:15～12:00　武藤智子（茨城大学・院）
「造形遊びの発生過程」
昼休み
発表　午後の部
・13:00～13:45　向野康江（茨城大学）
「児童画水準の歴史的変化」
・13:45 ～ 14:00　質問(５分)休憩(10分)
・14:00 ～ 14:45　新井哲夫（群馬大学）
「久保貞次郎の児童画評価」（仮題）
・14:45 ～ 15:00　質問(５分)休憩(10分)
・15:00 ～ 16:30　討議　司会
懇親会　未定
参加費：1000円（予定。研究冊子代含む）

参加は誰でもできます（学会員以外も参加可能)。会場準備のため参加者の概数を把握したいので、できれば１２月初旬までに以下のアドレス宛にe-mail等で参加希望をお知らせいただければ幸いです。
連絡先：金子一夫　〒311-0115茨城県那珂郡那珂町西木倉137　金子研究室
電話 029-228-8256
e-mail: kaneko@msv.ipc.ibaraki.ac.jp、kazuo-kaneko@mub.biglobe.ne.jp(自宅)
URL:http://www2u.biglobe.ne.jp/~ kaneko-k/

学会「西地区」研究発表会の報告と今後の開催について

花篤實(大阪芸術大学)

■第1回「西地区」研究発表会■

日時: 平成14年(2002)２月２日（土）

15:00 ～ 17:00
主題：美術教育とアートセラピー
会場:大阪教育大学　天王寺キャンパス
内容:
趣旨説明　藤江充（愛知教育大学）、花篤實
発表１　日野陽子（香川大学）「生きることと芸術」
発表２　栗山裕至(佐賀大学)「< 癒す力 > と < 癒える力>－美術教育の治癒的側面」
発表３　阿部寿文（大阪女子短大）「米国におけるアートセラピーの展開」
質疑応答、総括

第２回学会「西地区」研究発表会のお知らせ
(学会アートセラピー部会と一部合同開催)

日時: 平成 14 年(2002)12 月 7 日（土）
10:30 ～ 16:30
会場:大阪教育大学天王寺キャンパス大講義室
543-0054大阪市天王寺区南河堀町4－88
JR 環状線寺田町駅南口から徒歩４分 ,JR 天王寺駅から徒歩８分 , 地下鉄御堂筋線天王寺駅から徒歩８分
日程:
発表　午前の部
・10:30-11:15 花篤實(大阪芸術大学)「美術教育における文化受容の問題」
・11:15-12:00 松本アリサ(画塾・元大教大院生)「造形絵画教室における自由教育の可能性（フレネ教育を背景に）」
昼休み
発表　午後の部
・13:00-13:50 塩見知利(平安女学院大学)「幼児の創造性開発の為の実験－Creationof Fractal Color Map の実践」
・14:00-14:50 鈴木雅子(元宇都宮美術館)「視覚障害者のための鑑賞教育の実践」
講演
・15:00-16:30 野田燎(大芸大芸術計画学科)「音楽運動療法における実践活動(仮題)」
＊野田燎氏について
クラリネット奏者。欧州留学中に音楽療法と出会い、帰国後、積極的な演奏（療法実践）活動を展開。精神医学や臨床心理専門家中心でなく、芸術中心の療法活動としての音楽療法研究会を組織。現在、大脳生理学との共同作業を進めている今一番ビビットな実践者である。この講演から美術教育における療法（セラピー）の可能性を示唆されれば・・・。

発表に関する質疑応答の時間は、それぞれの時間帯に含めています。講演については、要望があれば、時間の許す限り行います。

参加費：500 円（研究冊子代含む）
参加は誰でもできます。(学会員以外も参加可能)。
連絡先：大阪教育大学天王寺キャンパス
岩崎研究室電話 06 － 6775 － 6616
yiwasaki@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

＊　＊　＊

■新入会員のお知らせ■

人見和宏（滋賀大学附属中学校教諭）
冨田礼志（大分大学助教授）
蜂谷昌之（トロント大学大学院）
保富仁之（和歌山大学大学院）
松岡宏明（島根県立島根女子短期大学講師）
田辺れい子（すまこどもアトリエ）
石田敏和（福島学院短期大学助教授）
日野あすか(大阪府立今宮工業高等学校講師)
大島賢一（千葉大学大学院）
大内　郁（千葉大学大学院）
上島浩美（千葉大学大学院）
中野　詩（千葉大学大学院）
高崎めぐみ（千葉大学大学院）
福良弘一郎（東京都中央区立月島第二小学校教諭）
小江香南子（鹿児島大学大学院）

特集 「教育課程を創る」(5)

美術の教育課程を創る
－選択履修における美術－

石井　理之(大阪府池田市立北豊島中学校)

今年度より新学習指導要領が実施され、中学校においても従来とは異なったアプローチで「美術」のカリキュラムを創っていく必要があると考える。2,3 年生においては週あたり１時間しか授業時間が確保できず、当然従来の枠組・発想では対応できない部分が多くある。特に実技については、時間数の関係で実施することの難しい教材も多く、教材内容を精選する必要がある。

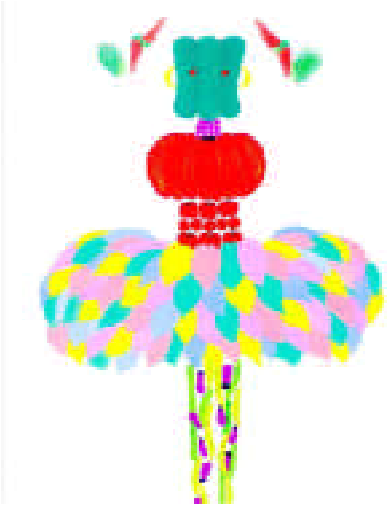
さらに教科としての「美術」と、総合的学習での美術科としてのアプローチ、そして選択学習においての「美術」をどのように運用していくのかを考えるのは重要なことである。本稿では、今年度より実施している選択学習を中心に報告したい。新学習指導要領では、「選択学習の幅を拡大し、生徒の能力に応じ、発展的な学習を行う」と明記されているが、本校の 3 年生においては、週 4 時間の選択学習のうち2時間を「補充的な学習」に充て、2 時間を「発展的な学習」に充てている。「補充的な学習」は文字通り学力補充を主目的としており、5 教科に絞りいわゆる受験の学力をつけていこうというものであるが、「発展的な学習」については生徒の興味・関心に応じて自分が選んだ教科単位の講座を学習しようというものである。これについては１年間を前期、後期に分割し、１人の生徒が前期１、後期１の年間２つの講座を選択するようになっている。

講座は教科によって様々な内容が設定されているが、どの教科においても大きなテーマを生徒に示し、具体的な学習については生徒が自ら考え選択する幅を持たせている。当然その中に美術講座も設定している。

美術講座においては、「平面」という大きなテーマを設定し、20 名の生徒が受講している。制作する具体的な内容に関しては、個別に生徒と相談して、作品のテーマ、技法を決定している。その際、時間、スペースの関係で物理的に難しいと思われる作品以外は基本的に生徒の意向を尊重して制作させている。

全員が自ら進んで「平面」作品を制作するために美術を選択した生徒たちではあるが、当然興味・関心の対象には違いがある。美術を選択した多くの生徒は、授業で取り組んだ内容をもっと深めてじっくりとやってみたいという思いを持っている。例えば透視図による空間表現や、大画面に構想画を描くことであったり、平面デザイン、マークデザイン等授業では時間とスペースの関係で作品サイズが小さかったり、描き込めなかったりしたものを自分が納得するように制作しようとしている。また一部の生徒は、自分が趣味で描いているイラストが授業時間内に描けると喜んでいる。教師は生徒が制作しやすい環境をつくり、生徒の必要に応じてアドバイスする。一見課外のクラブ活動と似た環境のようであるが、生徒の側にそのような意識はない。あくまで自分が選択した授業であるという意識を持ち、よい意味で緊張感を持ちながら、空間・時間を他の生徒と共有しながら制作を進めている。

一斉の教科の授業とは、制作を始める段階で生徒の意識が異なっているのは当然であるが、美術として必要な基礎・基本の意味を理解した上で、このような生徒の興味・関心を中心にしたカリキュラムを組み立てることの有意味性が選択授業から教科としての「美術」にフィードバックされるのではないだろうか。



作品１

作品2

＊　＊　＊

美術教育の課題と授業研究部会「夏季研究集会 2002」報告

新井哲夫（群馬大学）

去る８月２日(金)、午後１時から午後５時の日程で、サクラクレパス東京支社会議室において表記集会を開催した。当日の参加者は30名であった。今回の研究集会は、2000年８月２６日（土）に行ったプレ集会から数えて3回目に当たり、テーマも、第1回、第２回に引き続き､「美術科教育における授業研究／実践研究の課題と方法（その３）」である。

当日行われた口頭発表は、（１）飯塚淑光（群馬・鬼石町立鬼石小)、黒島清美（群馬・太田市立南中)、新井哲夫（群馬大)「図工・美術の授業を対象とする共同研究の試み」、(2)川合克彦（神奈川・川崎市立向丘中)「感性の評価」、（３）宇田秀士（奈良教育大)「美術科教育における授業研究／実践研究の課題と方法―教科横断的な大学院授業科目『授業研究法特論』開設の準備プロジェクトが示唆するもの―」の３件である。

（１）では、小、中、大の連携による鑑賞教育に関する共同研究の事例が報告された。研究の基本的な方法は、新井が題材基本プランを提示し、それを飯塚、黒島が自らの経験や持ち味をふまえ、児童・生徒の実態やカリキュラム全体との関連などを考慮して修正、アレンジし、実践し、その題材や指導方法の有効性について検証するものである。今回は、飯塚の「よくみてみよう　ちょうじゅうぎが」（小学校1年・鑑賞遊び）と、黒島の「絵画の美しさを感じ取ろう」（中学校1年・鑑賞）に授業実践がビデオ記録等を交えて報告された。

飯塚淑光（左)、黒島清美（右）の両氏

(2) では、＜授業において子どもたちの感性が生かされ、豊かな感性が育まれるということは彼らの心の中でどのようなことが起

こっているのか。授業をする指導者としては、その現象とどのようにかかわり、評価に生かしていくべきなのだろうか。＞＜教科目標を見据えた授業のためには、よさや美しさといった価値を意識下で子どもたちが認識する必要がある。無意識下の価値観の基で、ややもすると通り過ぎてしまう対象や事象を意識下のステージにたたせ、意識というスポットライトを当てる示唆をすることが大切なのではないだろうか。＞という発表者自身の問題意識と、それをふまえて実施した「季節のけはいを感じて『冬』」（中学校１～3学年）の実践が、ビデオ記録を交えて紹介された。

川合克彦氏

（3）では、大学院の授業科目開設に向けた教科を横断したプロジェクトの経験をふまえて、授業研究の方法論に関する報告と提言が、＜学校種、教科、領域の別に関わりない授業研究に共通する基盤部分＞と、＜図工科、美術科、芸術科に特徴的な部分＞の二つの視点からなされた。前者の視点からは授業力向上のための教師の＜メタ認知＞の重要性等が、後者の視点からは作品化することのよさ等についてそれぞれ指摘され、その上で、美術教育では、従来から経験的なレベルでの質的研究（いわゆるアクション・リサーチ）が行われてきていること、しかし今後は量的研究も質的研究も含めた授業研究の方法論を知るとともに、授業研究を意識化することが必要であるとの提言がなされた。

宇田秀士氏

発表後の討議では、（1）については三者がフラットな関係で共同研究に関わっている点について評価する発言が見られたほか、題材展開の細部については、さらなる改善ための具体的なアイディアが数多く寄せられた。また（2）については、子どもたちに気付かせ、意識させるための教師の指導力や具体的な指導方法に対する発言が多くあり、教師の観察力や直観力、指導に際しての豊かなバリエーションの重要が指摘された。（3）については、教科教育のベースとなる共通部分に対する研究の重要性やうまくいかなかった授業を対象とする分析的研究の必要性、他教科との連携授業による多面的な子ども理解の可能性、等々について発言があった。

冒頭にも記したように、今回の集会を含めて、同一テーマを３年間継続して追究してきたわけであるが、一定の成果は得られたのではないかと思う反面、さらにステップアップするためには、研究集会だけでなく、研究部会そのものの在り方も含めて、見直しの必要性を感じている。

最後になったが、研究集会において貴重な発表をしていただいた方々、多忙な中参加していただいた方々、運営にご協力いただいた方々、そして会場を提供していただいたばかりか、細やかなご配慮をいただいたサクラクレパス東京支社の西村四郎氏に対し、この場を借りて感謝申し上げます。